

東京郊外に広がる都市

——大泉学園都市計画を例に——

太田尾 智之

はじめに

少しでも歴史に興味をもってもらいたい、というのが高校生に日本史を教える教員にとつての共通の願いであるといったら言い過ぎになるだろうか。筆者が勤務する東京都立大泉高等学校は、二〇一〇（平成二二）年に附属中学校を開設した都立の中高一貫教育校である。ふだんの授業では教科書の内容を消化する時間的余裕すらあるわけではないが、歴史のもつ「おもしろさ」を生徒が感じられるような授業を目標に悪戦苦闘している。

本稿では高校二年生の必修日本史B（二単位）で実践した、大正〓昭和初期における東京郊外の都市化を取り上げた授業を報告する。

このテーマを選んだ理由は三つある。

第一に、生徒に身近な素材だからである。西武池袋線の大泉学園駅は勤務校の最寄り駅で、多くの生徒が通学に利用している。ふだん何気なく利用している駅の名称に隠れている歴史を取り上げること、生徒が歴史を身近に感じられるのではないかと期待した。

第二に、東京の歴史への関心を育むことができる考えたからである。二〇一三年に東京都教育委員会が発行したテキスト『江戸から東京へ』は、近現代の歴史について東京に残る史跡や文化財などの身近な教材を活用した編成になっており、都立高校の新生徒には一部ずつ配付されている。最近では、二〇二〇年オリンピック・パラリンピックの開催都市が東京に決定したこともあり、東京の歴史や文化に対する世間的な関心も高まっているように感じられる。テキスト『江戸から東京へ』を活用することは、東京で歴史を学ぶ高校生にとって意義あるものと考えられる。本時のテーマも同書で扱われている。

第三に、かねてより筆者が本授業案を計画していたからである。というのは、先述の『江戸から東京へ』が発行された直後に参加した東京都の研修プログラムにおいて、同テキストを用いた研究授業「練馬区の独立」を実践したことがあった¹⁾。その際、練馬区の独立運動が一九三二（昭和七）年に始まった背景となる、大正〓昭和初期の練馬地域の状況を充分に扱えなかつ

たことが反省点の一つであった。そこで、今回の授業で練馬地域の宅地開発を学ぶことで、三学期（学年末考査後）に練馬区の独立を扱う伏線にしたいと考えたのである。

地域史を取り上げる授業はありふれた手法であり、また東京のローカルな素材を用いた授業がどれほど先生方の参考になるか心許ない限りであるが、以下に授業の流れと生徒の反応を報告する。

一 授業の展開

(一) 導入

授業の構成を前半と後半に分け、前半は東京の郊外開発の進展について、後半は大泉地区を例に学園都市構想について学習することにした。

授業の冒頭、ICT機器を活用して西武池袋線大泉学園駅の外観写真を示す。生徒は最寄り駅の写真と即座に理解するので、すかさず「大泉学園とはこの学校を指すのだろうか」と問いかける。そもそも駅の所在地は練馬区大泉学園町ではなく東大泉なので、駅の名前そのものが実際の住所とは異なっている。生徒たちが通学する大泉高校の住所も東大泉であるから、「大泉学園」に該当することはありえない。駅周辺には大泉学園小学校や大泉学園中学校など「大泉学園」を冠する学校が存在す

るが、これは戦後の開校であり、都立大泉学園高等学校（現在は都立大泉桜高等学校に統合）も同様である。

「大泉学園」とは何かを答えられないでいる生徒の様子を確かめつつ、「大泉学園」の歴史が本時のテーマであることを伝える。

(二) 授業前半——東京の郊外開発の進展

はじめに、東京府の人口推移を示す表を確認する。⁽²⁾

東京府全体の人口に着目すると、一九一四（大正三）年の三二〇万二六六九人から時代が経つにつれて人口が増大している傾向が読み取れる（ただし一九一七年から一九二〇年ではほとんど変化がない）。既習事項である大戦景気の動向と工業化の進展を想起させ、変化の背景をつかませる。『大阪パック』（一九一七年七月一日号）に掲載された漫画「鋤鋤捨てて」には、画面手前に閑散とした印象の農村、画面奥には工場群の黒煙がたちのぼる都市の景観が描かれている。⁽³⁾ 大戦景気によって工業生産額が急増した時代におこった、農村から都市への人口移動という現象を漫画が示していることに気づかせる。

次に東京府全体の人口が増大したもう一つの要因として、教育の普及に注目させる。⁽⁴⁾ 一八八六（明治一九）年の小学校令に始まった義務教育は、日露戦争後の一九〇七年に六年間となり、就学率も九七パーセントを超えた。こうした趨勢を受けて、第

一次世界大戦後に東京の高等教育機関が増加する。原敬内閣が大学令を公布し、高等教育機関を拡充したことは既習事項である。実際のデータを見てみると、一九一五年には合計四校にすぎなかった大学が一九二〇年に一六校、一九二五年には三四校にまで増加している。⁵⁾これに伴い、学生数は一九一五年に九六九六人、一九二〇年に二万一九一五人、一九二五年に四万六六九〇人を数えるようになった。大学を卒業した学生たちは俸給生活者（サラリーマン）となり、一般労働者とともに大衆文化を支えることになった。

ここで再び東京府の人口推移の表から、大正〳昭和初期は東京市一五区に比べて郊外人口の伸びが著しいことを確認させる。とくに、一九二三年に一七〇万六七〇〇人だった人口が一九二六年には二四九万九二〇〇人にまで激増している。この現象の背景として関東大震災（一九二三年）の影響があることに気づかせたうえで、急激な人口増が生み出した課題に思い至らせる。すなわち急増する人口に宅地が追いつかず、新たな住宅地が必要となったのである。

こうして関東大震災を機に東京郊外の宅地化が展開し、山手線の駅を起点とする郊外開発が進み、京王線・池上線・目蒲線・東横線・小田急線・西武線・東上線など郊外へ延びる私鉄がつぎつぎに敷かれる。郊外の一戸建てに住み、鉄道を利用し



図 1 大泉学園町の町並み

て通勤するサラリーマンの生活スタイルが生まれていく。

土地会社は住宅地開発を進め、鉄道会社は行楽地・遊園地の開発にいそしんだ。練馬地域でいえば、宅地開発としての「城南文化村」や「大泉学園都市」などが計画され、郊外の遊園地として豊島園が開かれた。大泉学園都市については授業の後半で詳しく触れるため、ここでは豊島園についての資料を回覧した。⁶⁾食堂・音楽堂・花壇・ウォーターシユート・運動競技場・

児童遊戯・ボート遊びなど、休日のサラリーマン一家向けに園内が整備されていたことに気づかせる。

(三) 授業後半——大泉学園都市の構想

大泉学園都市計画について知るために、一九三二年における大泉学園町の地図を示し、大泉学園駅の北方に基盤目状に整然と区画された町並みがあることに注目させる。これは学園都市計画の名残であり、実際に筆者が現場で撮影した写真から一直線に伸びる町並みを確認する(図一参照)。

このような町並みはいかなる計画のもとに生まれたのか、大泉学園町の一角に位置する大泉公園の片隅には町の由来を記した一九八七年建立の石碑があり、次のような碑文が記されてい



図2 大泉公園にある町の由来を記した碑

る(丸数字及び傍線部は筆者、図二参照)。

古は此の地を広沢の原と呼び、明治二十四年大泉村となり誰云うことなく長久保やまと云う。公園附近八町歩余は妙福寺の御朱印地故に御朱印と呼びたり。大正の世、村長見留勝氏は古河市兵衛氏と親友にして屢々此の山林に狩猟を行い中央の情勢を把握す。①会々箱根土地会社社長堤康次郎氏の開発構想に共鳴し大正十三年箱根強羅の温泉に地主たちを招待させ大泉学園都市計画の賛同に至らしむ。

② 駅北口より二軒の新道を拓き其北側に五十万坪の区画工事に着手す。駅名を大泉学園駅と改め、一橋大学誘致の運動を展開しつつ同十五年工事完了、当時十三才の水谷八重子を始め芸人多数来場し花火の音高らかに祝典と宣伝行事に村は未曾有の祭典に沸けり。折りしも電灯の導入と土地資金の流通に依り文化の向上、村民意識の改良大なり。昭和九年当町会長鈴木乙免氏は風致協会を作り協会は妙福寺の山林一町二反を野遊地に、東京市農会は三町七反を市民農園に夫々借地して作る。市は多額の費用を投じて野遊地に万般の施設をなす。秋季には甘藷堀り、運動会等市民多数が来訪し東京の一名所となる。

生徒たちとこの資料を読み、大泉学園都市計画の推移を確認していく。

傍線部①によれば、一九二四年に箱根土地株式会社（一九二〇年設立、現プリンスホテル）が大泉学園都市計画を構想したことが発端であった。箱根土地株式会社の社長堤康次郎は会社設立以前から軽井沢千ヶ滝を手始めに、翌年に箱根強羅・仙石原の開発を進め、東京の郊外開発にも積極的な姿勢を見せた。

傍線部②からは、大泉学園都市計画の具体的な内容が伝わる。箱根土地株式会社は「駅北口」から二キロメートルの道をつくり、五〇万坪の開発計画を立てたという。ここでいう「駅」とは武蔵野鉄道（現西武池袋線）の東大泉駅を指し、同駅は箱根土地株式会社が都市計画の一環として武蔵野鉄道に寄付したものであった。当時の駅舎の写真をみると、オシャレな三角屋根の外観が特徴的である。⁸そして、もともと重要な、学園都市の中心に位置する「学園」とは東京商科大学（現一橋大学）であった。同学のキャンパスが神田から大泉に移転してくることを前提に、駅名が「大泉学園」と改められた。資料に「誘致の運動を展開」とあるのは、公園・野球場・テニスコートなどのほか、住宅地などの諸施設を整えたことを指す。

大泉学園都市は日本最初の学園都市計画として注目されていたが、東京商科大学の誘致に失敗した。結局、大学の移転先は国分寺と立川の間につくられた新駅（現JR中央線国立駅）を中心とするエリアに落ち着き、現在に至る。いわゆる国立学園

都市である（ちなみにこの用地も箱根土地株式会社が取得していた）。

当初の計画が幻となった大泉地区では、大学や公園のために確保した用地を住宅用分譲地に変更し、住宅地としての環境のよさを宣伝することになった。当時の新聞記事や第三回の分譲案内によれば、第一回・第二回の分譲の売れ行きは好調であり、投機の対象として分譲地を購入した人も多かったと推定される。⁹一九三三年には大泉地区の景観を保護するために風致地区が結成され、北部に野遊地と市民農園が整備されるなど、行楽客を誘う努力も行われた。こうした経緯もあり、現在でも大泉学園町は閑静な住宅街という印象が強く、地下鉄線の延伸を望む運動が長らく続けられていることからは、あまり交通の便がよくない地域であることも伝わってくる。

以上、第一次世界大戦後から東京の都市化はしだいに郊外まで及ぶようになったこと、とくに関東大震災以後に大泉地区では学園都市計画が進められたことを確認して本時のまとめとした。

二 生徒の反応

紙面の都合上、生徒から寄せられたコメントをすべて引用することはできないが、集約した結果をもとに紹介させていただ

く。

(一) 大泉学園都市計画を初めて知ったというコメント

「三歳のときから大泉町に住んでいるが、大泉学園の由来は一七歳になった今、初めて知った」

「自分たちの学校の最寄りの駅にこんなにも歴史があるとは思っていませんでした」

「大学・学生の増加によって産業的に整備された町というのが本当に意外だった」

「まさか一橋大学だとは思ってもよらなかった」

「毎日使っている駅の話で、とても面白かった」

「話を聞いてから、通っている道が少し違って見えるかなと思っただけ」

(二) 歴史に興味・関心を抱いたというコメント

「大泉学園町の方に行ったことがないので、今度行ってみたいと思った」

「スルーしがちな公園の石碑の文字などもちゃんと読んでみると面白いのかもしれない」

「歴史のつながりはおもしろいと思った」

「自分の住んでいるところの名前や最寄り駅の名前の由来についても知りたくなった」

「もっと大泉について知りたくなった」

「それぞれの土地にはちゃんと歴史があって今の形が成り立っていることを改めて実感できたので、とてもおもしろかったです」

「日々、様々なことに興味・関心を抱き、とことん調べたり考えたりすることが大切であると改めて考えさせられた授業でした」

「歴史の授業は、今までは身近でなく、遠い存在のものを扱っているように感じていたが、今日は大泉学園の成り立ちから都市作りのことまでを学べたので、分かりやすかった」

(三) コメントの分析

大泉学園の歴史を初めて知ったとの意見がたいへん多かった。大学の誘致に失敗したという話をどこかで聞いたことがある生徒もいたようだが、詳しく学んだのは今回が初めてだったようである。長年の疑問が氷解した生徒もいたようで、授業の内容に関する肯定的な意見が多数を占めたことは筆者にとりて喜びであった。

さらに嬉しかったことは、歴史に興味をもてた、自分の住む地域についても調べてみたいという声があがったことである。とりわけ、ふだんの授業内容に興味をもてないでいた生徒のなかにもそのような意見があったことには半ば驚かされ、自らに関わり深い土地の歴史を調査してみたいというコメントの多さは

筆者の予想をよい意味で裏切るものであった。

このような生徒の反応を受け止め、今後の授業にどのように活かしていくかが筆者に与えられた課題である。

註

(1) 平成二三年度東京都教育研究員研修において実践。いわゆる東京二三区のうち最も新しく誕生した練馬区が、日本憲法の施行直後に板橋区から分離・独立した経緯を当時の資料や地図をもとに考察させた。『江戸から東京へ』（東京都教育委員会）一三二頁掲載の「東京二三区のスタート」から構想した授業。

(2) 『新詳日本史』（浜島書店）二六二頁掲載の表を使用。

(3) 『江戸から東京へ教授資料』（東京都教育委員会）一五三頁掲載の図を使用。

(4) 『詳説日本史』（山川出版社）三二〇頁掲載のグラフを使用。

(5) 『山川詳説日本史図録』（山川出版社）二七四頁掲載の表を使用。

(6) 生涯学習部生涯学習課文化財係・練馬区郷土資料室編『鉄道の開通と沿線の風景』（練馬区教育委員会、二〇〇五年）、『常設展示ガイド』（練馬区立石神井公園ふるさと文化館、二〇一〇年）を回覧した。

(7) 練馬区公式ホームページ (http://www.city.nerima.tokyo.jp/annai/kankojoho/nerimawalk/sanpo/choo/ooizumi-chuunpanfufiles/sanponichi_04_170331.pdf) 掲載の地図を使用。

(8) 前掲註(6) 掲載の写真を使用。

(9) 練馬古文書研究会編『練馬ふるさと事典』（東京堂出版、二〇一一年）の記事による。

（おたお・ともゆき／東京都立大泉高等学校教諭）